

研究成果概要

所属学校名 津市立南郊中学校

職・名前 教諭 田中 恵美

- 1 留学先の名称 三重大学特別支援教育特別専攻科
- 2 研究主題 障害児の性教育に対する教師のニーズに関する調査
- 3 研究成果の概要

I 問題と目的

思春期は、第二性徴による身体的変化から始まり、身体的にも心理的にも大きく変化していく時期である。知的障害のある児童生徒についても、感受性が高まりやすく、新しい身体図式を獲得することに困難を覚えたり、親や教師とは異なる新たな社会的関係を構築する上で制約があるなどの葛藤や戸惑いがより強まるという傾向がある。

知的障がいのある子どもへの性教育に関し、教師に対するアンケート調査も数多く存在するが、教師の性教育に対する困り感や苦手意識、経験からの気づきに基づいた実践報告や調査は見当たらなかった。

そこで本研究では、A市内の小学校および中学校の特別支援学級（知的障害）における性教育への取組状況や困り感、および特別支援学級担任の性教育への意識について探ることで、教師が性教育についてどうとらえているかという意識についての課題を明らかにするとともに、教師の性教育に対する課題解決方法について検討することを目的とする。

II 方法

A市内の知的特別支援学級が設置されている小学校、中学校（27校、41学級）の特別支援学級（知的障害）の担当教員を対象にアンケート調査を行った。期間は平成25年12月から平成26年1月までとした。アンケート調査は、井上・菊地・遠藤（2010）が使用した、「フェイスシート」と「特別支援学校の児童生徒の性に関する調査～教員を対象として～」をベースに作成した。

III 結果

A市内中ブロック31校の小中学校のうち27校について回答が得られた。

IV 考察

A市の特別支援学級担任は、知的障害児の性行動に対する問題意識が高く、性に関する指導がなされている実態が窺われた。しかし教師は知的障害児が起こす性行動の問題に関しての対応が主になってしまい、性教育を系統立てて学ぶ時間を確保することが困難であること、また教師が知的障害児の成長発達を学ぶ機会が少ないことにより、計画的な性教育指導の必要性を認識することが困難なことがあげられる。

上記のような問題に対し、教師が性教育に関する学びを確保するためには、教師同士の連携を主眼に置いた「コーディネーション委員会」の活用について検討する必要がある。知的障害児の性行動についての教師同士の学びの機会や、性教育への認識を深めることができるという点において大きな意義があると思われる。

また本研究では保護者との連携の重要性と教師間の研修の重要性を述べた。その上で、今後実際の教育現場において、性教育のカリキュラムの検討を行うことが大切になってくる。教師が理論を学び、教育現場で実践し、児童生徒の反応を見ながらよりよいカリキュラムを作っていく。児童生徒が生き生きと生活できるように教育カリキュラムを工夫し洗練させていくのは、教師としての使命だと私は考える。理論と実践の往還のなかで、子どもに対する性教育を実証的に検討していくことが、今後ますます必要になってくるであろう。